

2022/7/24

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑱

『ヨハネの黙示録 7章前半 一神の計画』

黙示録 6章では、第6の封印が解かれました。人々は、肉体の死が訪れる時のことを「誰がそれに耐えられるだろうか。」と恐れています。死は人生の中で最大の患難です。そこで、神は、患難に対して、どのように向き合えば良いかを教えておられます。

■御使いが四方の風を押さえる

「この後、私は見た。四人の御使いが地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押さえ、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた。」

(黙示録 7:1)

この世は死の世界なので、必ず苦しみに遭遇します。その中には、人の力で解決したり、乗り越えたりすることができる苦しみもありますが、死を解決することは、誰にもできません。しかし、神はどんな苦しみであっても私たちを支えてくださいますから、死をも解決してくださいます。御使いが風を押さえる様子は、患難に会っている私たちを、神が支えてくださることを表しています。ところが、実は、これが試練なのです。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」(Iコリント 10:13)

この御言葉は、クリスチャンではない人たちの中でもよく引用され、間違っ理解されることも多いので、正しい意味を理解しておきましょう。

どんな患難に会っても神が助けるということが、なぜ試練なのでしょう。それは、神が差し伸べてくださる御手につかまるのかつかまらないのか、つまり、信じるのか

信じないのかという選択が生じるからです。これが試練であり、神が用意した脱出の道です。

神が私たちに問うておられるのは、常に信仰です。行いではありません。神の前にへりくだり、神のことばを聞くのかということです。神はすべての人の心に呼びかけておられます。人によってはそれを良心と呼んだりしますが、神が心のうちに願いとして起こさせる、その声は、聖書を通して確認することができます。祈り、聖書を読んでいくと、心に突き刺さる御言葉に出会います。それは、神があなたに語っておられるからです。その言葉に踏みとどまることを選択し、何をすればよいのか自分にできることを祈り、求め、生きていく、それが信仰です。

神はただ人の苦しみをみているだけではなく、御言葉を常に語り、救いの御手を差し伸べておられます。試練と共にある脱出の道とは、神のことばを聞き、神の御手にしがみつくことです。

■額に印が押されている者とは

「また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。「私たちが神のしもべたちの額に印を押し、てしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」（黙示録 7:2-3）

「額に印を押す」とは、どういうことでしょうか。

「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」（黙示録 3:5）

ここでは、「額に印を押す」ということが「白い衣を着せる」と言い換えられています。つまり、額に印を押されるとは、神が苦しみの時に御手を差し伸べ、その呼びかけに応答する選択をした者に神が白い衣、すなわち、朽ちない体を着せるということです。これが、死の恐怖におびえている者たちに語られている神のことばです。

「それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。」(黙示録 7:4)

「14万4千人」というのは、多くの人を象徴的に表す言葉です。エホバの証人などは、これを実数と受け取って、天国に入ることができるのは14万4千人だけだと教えていますが、そのようなことはありません。では、「イスラエルの子孫のあらゆる部族の者」とは誰を指すのでしょうか。

「ユダの部族で印を押された者が一万二千人、ルベンの部族で一万二千人、ガドの部族で一万二千人、アセルの部族で一万二千人、ナフタリの部族で一万二千人、マナセの部族で一万二千人、シメオンの部族で一万二千人、レビの部族で一万二千人、イッサカルの部族で一万二千人、ゼブルンの部族で一万二千人、ヨセフの部族で一万二千人、ベニヤミンの部族で一万二千人、印を押された者がいた。」(黙示録 7:5-8)

このイスラエルの12部族の数を合計すると、ちょうど14万4千人になります。では、現在、この部族はどうなっているのでしょうか。長い歴史の中でイスラエルという国は分裂して世界中に散ってしまい、今残っているのは、ユダの部族だけです。そのユダの部族でさえ、散らされていた期間がありました。

「その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた。」(黙示録 7:9)

つまり、額に印を押された者たちは世界中に散らばっていて、世界中からあらゆる民族が救われるということです。これは、「だれにも数えきれないほどの大勢の群衆」ですから、ここからも14万4千人というのは、「大勢の人」を表す象徴的な言葉であると確認することができます。この人々を「神のイスラエル」という呼び方をすることもあります。

キリスト教の宣教の歴史を考えてみても、まず救いはユダヤ人に示され、そこから全世界に広がって生きました。救われる人々は、肉のイスラエルに限定されているわけではありません。

「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」(マタイ 24:14)

イエス様ご自身が、神の福音は全世界に証しされ、あらゆる国民に宣べ伝えられると教えておられます。

「ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。」

(ガラテヤ 3:7)

イスラエルのことをアブラハムの子孫とも言います。しかし、神がアブラハムに立てた永遠の契約は、すべての国民に約束されていると教えられていて、それは、あらかじめ語られていたと述べられています。アブラハムは信仰によって義と認められることのひな型であり、つまり、信仰によってすべての人が救われることのひな型です。

「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なものは新しい創造です。」(ガラテヤ 6:15)

つまり、イエス・キリストを信じる者たちが神のイスラエルなのです。律法を持っているかどうかは重要なことではなく、信仰によって救われているかどうか重要なことなのです。

新しい創造とは、この御言葉の前に語られています。

「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、※世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」(ガラテヤ 6:14)

(※新改訳聖書 2017 は、「世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」)

私たちはイエス・キリストによって、この世に対して死に、新しい永遠のいのちをいただきました。自分は、「死んで新しく造られた者である」、これが重要なことなのです。

私たちは見えるところの現実がまったく変わっていないので、自分が死んで新しく創造されたことを実感していません。しかし、聖書のことばは、ただ信じるものであって、あなたが納得するかどうかは問われていません。特に十字架のことばは人には

愚かであると聖書が語っている通り、この世の基準ではとても信じることはできません。しかし、神の計画は、この世においては愚かだとしても神のことばを信じる者を救うという計画なのです。

神のことばは、もともと理解不能なものなのです。もし、理解できるものであれば、それは信じたのではなく、納得したということになります。もし納得したものであるならば、人はその賢さのゆえに納得できたのだと自分で誇ります。だから、神は誰も誇ることはないように、神のことばを人には愚かに聞こえるようにしたのです。

つまり、神が人に求めているのは、神のことばを聞き、そのことばを信じることです。それによって、人が持っている能力には一切関係なく平等に救いを受け取ることができるようにしておられるのです。幼子でも障害を持っていても関係なく、神が差し伸べた御手をつかむ者は救われます。その神が、「あなたは死んだ」と言っておられるのです。そして、「イエス様と共に復活して生きる者となった」と言っておられるのです。次のようにある通りです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:24-25)

イエス・キリストのことばを聞いて信じている私たちは、死んでいたのに生きる者となりました。これこそが十字架のことばであり、私たちが信じるべき最も重要な言葉です。信じている者は永遠のいのちを持っていて、死からいのちに移されているということ、これが、黙示録 7:3 が教える「額に印を押されている」ということです。つまり、死という患難におびえる人々に対して神が語っておられることは、「心配しなくてもよい、私があなただを救うから」ということなのです。

■信仰とは「そう思うこと」

現実にはまったく変わっていないことを信じるのは、多くの人にとって難しいことに思えます。確かにイエス様を信じているのですが、どこに白い衣を着せられたのか、どこに永遠のいのちを持っているのか、どこに新しく創造されたのか、まったくわか

らないのです。聖書に書いてあっても、それが事実であるとはどうも思えず、信じることができない自分はなんと不信仰なのだろうかと思ってしまう人が大勢います。

ですが、覚えておいてください。私たちが「とても信じられない」と言って葛藤するのは、すでに信じているからなのです。信じているからこそ、信じるか信じないかという葛藤が生じるのです。すでに死からいのちに移されているから、葛藤するのです。

わかりやすくたとえるなら、あなたが買い物に行って、何かを買おうかどうしようか迷う時、あなたの中にはもう「それがほしい」という思いがあるということです。ほしいと思わなければ、迷うことはありません。

それと同様に、「信じられない」と言って迷うのは、心の中にすでに信じる思いがあるからです。あなたは神にとらえられ、永遠のいのちを持っているので、信じられない自分に葛藤するのです。これが不信仰との戦いです。

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」（ローマ 6:11）

パウロは、「信じなさい」ではなく「思いなさい」と励ましています。「信じられない」と言って悩んだり、「本当だろうか」「大丈夫だろうか」と不信仰になったりするたびに、「私は死んだものであり、イエス・キリストと共に生きる者なんだ。私は死からいのちに移されているんだ。」と、思えばよいというのです。

死の苦しみを前に、誰がこの苦しみから救ってくれるのかと叫ぶとき、神のことばだけが私たちに肯定的な希望を与えてくれます。神のことばだけが、私たちの心を未来に開き、平安を与えてくれるのです。